

[70] 武原はんの芸 その伝承と開花三輪

神崎えん

藤村志保

2005年1月8日 東京新聞 夕刊

洋の東西を問わず、舞踊はもっぱら体で表現するものだから、動きの自在な若いうちこそが花ではないかと思われがちだ。しかし日本舞踊など、むしろ体の元気が少なくなつて、その表面的な勢いが殺がれてきた頃に、ようやく本物の味わいにじみ出ることがある。旬の物産をさらに干したり漬けたりした熟成の味とでも言ったらいいだろうか。時分の花も長続きするものではないが、時をへて円熟した芸も、先の限られた命との競り合いだから、安閑としていられるものではない。生身なまみの芸が咲かせる舞踊という花は、いずれ移ろいやすい。

地唄舞の武原はんも長寿で注目された人だった。平成十年に九十五歳で逝ったが、晩年にはサバを讀んで、実際より多い年齢を言ったと聞いたことがある。本人に確かめたら「おかはんのお腹なかに一年いたから」と答えたそうだ。

もつとも、はんの舞は若くしてすでに独自の境地に達していた。規範に厳しい日本舞踊の世界で、独創的な造型や間合いを自身の芸として貫き、そ

[70] 武原はんの芸 その伝承と開花三輪

神崎えん

藤村志保

2005年1月8日 東京新聞 夕刊

れに広範な観客がついていった。武原はんという舞踊家の存在が地唄舞を世に知らしめ、人気を高めたことは否定しえない事実である。

多くの門弟を擁する稽古場を持っていたわけでもなく、また流派の頂点に君臨していたわけでもないのに、文字通り体一つで名を成し、忘れがたい印象を刻んだのは、ほとんど奇蹟に等しい。だがそれだけに当人が世を去った後には、その足跡がおぼろになってしまっているのではないかと、そう思っていた。

ところがここに来て、亡きはんを改めて思い起こさせる舞台に出会った。直々にはんの薫陶をうけた舞い手がついにその花を咲かせはじめたのである。

その一人は神崎えん。父、秀珠の後を継いで神崎流の家元になって数年を経たが、しっかりした気骨と上滑りしない地道な精進が見事に安定した造型として凝縮した。舞台に座していきえ感じられる強さ、しなやかさは、体のものであると同時に心のものでもある。艶あでやかさを越えた艶つやと

[70] 武原はんの芸 その伝承と開花三輪

神崎えん

藤村志保

2005年1月8日 東京新聞 夕刊

い
う
べ
き
か。

もう一人は藤村志保。はんに心酔し、師事して、女優として多忙な日々を稽古を重ねた。姿形の美しさは元よりだが、動きそのものが透徹した境地を描き出すには、やはり年月が必要だった。はんも「あなたは美人だから」と人に言われるのが悔しかったと語ったことがあるが、舞の美は舞い手の生来の美しさとは別の次元にある。

武原はんを大輪の菊とするならば、えんはまるやかな椿、志保は芯高のバラにたとえられるだろうか。師はんの神秘的な香り高さにはいまだしてはあっても、瞬間瞬間に師を彷彿とさせずにおかない舞台は、芸の命が脈々と受け継がれていることを感じさせる。

舞踊は生身のはかない芸。とはいうものの芸の神髄は、変容しながらも末広がりの生命力を持つ。